

戦後の東南アジア学を築いた功労者のひとり、鶴見良行の著作に「ナマコの眼」という本がある。ナマコは眼をもたないが、もしも眼があつたらどのように世界を見ていたらう。そんな問題意識から書かれた本である。鶴見は、自動車やバナナ、ナマコなど、国際的に取引されるさまざまなお品をとおして、国際的な経済格差や人間社会の矛盾、世界史の滑稽さなどを描いた。

鶴見はナマコ取引の足跡をたどって、ミクロネシアから東南アジア、北西日本へと旅をする。オーストラリアやメラネシアも、ナマコ取引の歴史の重要な舞台である。飲み屋や台所が聞

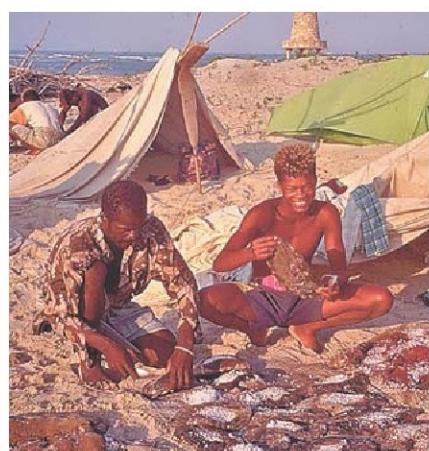
きとりのフィールドになっているのもおもしろい。しかしそんな彼も、アフリカのナマコ取引にまでは目を向けていなかつた。

## 考えろ 舌

22

### みんなく 食の民族誌

中国本土では本格的な経



### マダガスカルのナマコ

飯田 卓

マダガスカルの都市の浜辺でキャンプをするナマコ漁師たち。漁場が遠いので、捕ったナマコは塩漬けにして数日分まとめて売る(筆者撮影)

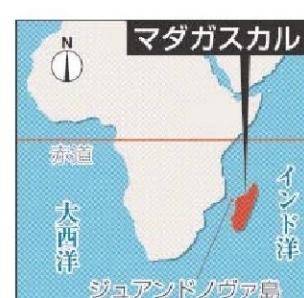
## 中華の食材、乱獲で枯渇

20世紀初頭には、すでにナマコの輸出が始まっていたことがわかる。また、1970年代あたりにもナマコ採取のブームがあったことを、漁村の年長者たちが記憶している。このときのブームは、村の近くのナマコが捕りつくされてしまつて、終息を迎えた。

ナマコは動きの鈍い動物だから、人間の目に留まればすぐに捕まってしまう。いくら多産なナマコでも、次々に捕らえられていく同胞たちの穴埋めをするほどには産卵できなかつたのだらう。こうした局所的な資源枯渇は、90年代にニューギニア(メラネシア)でもモザンビーク(アフリカ)でもガラパゴス諸島(南アメリカ)でも生じていたと、日本の研究者たちは報告している。

マダガスカルでわたしが調査した漁村では、90年代にブームが再到来したとき、捕るべきナマコはすでにほとんどいなかつた。しかし漁民たちは、漁師のいない遠隔地や人の住まない

### いなくなれば、遠隔地まで漁へ



一部の漁民は、絶海の孤島ジュアンドノヴァ(Ju an de Nova)にまで出漁しているという。インターネットで調べてみてほしい。

(国立民族学博物館准教授)

源枯渇は、90年代にニューギニア(メラネシア)でもモザンビーク(アフリカ)でもガラパゴス諸島(南アメリカ)でも生じていたと、日本の研究者たちは報告している。マダガスカル漁民にまで伝わる。そういう時代なのだ。そして、村にナマコがいなければ、いかでといって漁をやめるのでなく、あるところまで捕りに行く。そういう時代なのだ。

中国の食欲は、すぐさま普及したものだ。マダガスカル漁民にまで伝わる。そういう時代なのだ。そして、村にナマコがいなければ、いかでといって漁をやめるのでなく、あるところまで捕りに行く。そういう時代なのだ。